



第 4 9 号
平成 十 四 年
(2 0 0 2)
10月15日発行
(年 4 回 発 行)

文音と校合

東 明雅

連句一卷を巻き上げたら捌きが校合する。芭蕉も「やまなかしゆう」の翁直し「馬かりて」の一卷にその実体を示している。ところで文音の場合はいかがである。たとえば蕪村・几董両吟の文音「ももすもも」の巻では満尾まで四ヶ月の間、二人は会合したり、手紙を交換したりして十分に検討し、推敲しているから改めて校合する必要はなかったであろう。

私はこの七月から八月にかけてA氏・B氏とFAXで三吟源心一卷を首尾した。このような場合は、出来たら三人が一堂に集って、皆で検討し、校合するのがよからうと考えたので、九月中旬、A・B両氏とお茶の水の茶房に集まり、合評会を催した。まず、作品を披露する。

源心 深川やの巻 (文音三吟)
深川や手練れの友と簾買ふ A 三夏 自他半

予報はづれの梅雨晴れの空
競走馬生まれし牧を恋ふるらん
コンバインにて仮眠とる人
着メロに秋の新曲取り入れて
思ひつめては文を書く月
銀杏をむいてくれたがなれそめで
今評判の丘のホスピス
将棋さしとか蓬髪の垢面なり

いまだ直らぬ煙草嗜む癖
久々に父の運転お伴して
そぞろ神みて旅に誘ふ
黙保ち脊梁山脈花を待つ
春塵一過鯉を飼ふ村
閩秀の童話作家とふらここに
おかおむすび半分に分け
応援はラッキーセブンで盛り上り
快打で果すキャプテンの責
わが家系流れて狂ふ二天の血*
渚を切つて夏燕飛ぶ
はつたいにむせれば背に君の息
雪山登山ひとつ寝袋
月光を照り返したる樹氷原
漂流民の望郷の詩
大正ロマン愛する者ら皆老いて
カフェでふふむ好きなりキニール
花ぶぎ北辺の町武家屋敷
蜂の群がる蜂飼の帽

B	仲夏場
M	場
A	他
B	三秋
M	自
A	晩秋自他半
B	場
M	他
A	他
B	自
M	自
A	仲春場
B	場
M	自
A	三春自他半
B	場
M	自
A	他
B	場
M	自
A	三夏場
B	場
M	自
A	三夏自他半
B	場
M	自
A	他
B	場
M	自
A	自他半
B	場
M	自
A	他
B	場
M	自
A	自
B	晩春場
M	他
A	自
B	自
M	三春他

*二天は宮本武蔵
校合は①用字の検討。誤字・脱字・仮名遣

の誤・片仮名の打越・発句同字・同字三句去り・一卷一字(春・夏・秋・冬・恋)などの字は一卷に一度しか使わない)の検討から始まる。
②発句には切字が必要だし、脇は発句と同時間場所が原則であり、第三は胴切を嫌い、特別な止めの形がある。これらが守られているか。
③全巻にわたって、自・他・場が打越になっていないか、また稿(たとえば、自・自・場・場・他・他のような形)になっていないか、さらに内・外もたとえば、内・外・内・外というような展開はよろしくない。さらにかな止め・漢字止めがそれぞれ五句以上続かないようにする。

④月・花・恋。月花は定座にとられる必要はないが二花三月、それぞれ変化のある新しい句になっているか。恋も五句続ける時は一続きの恋になっていないか検討する。
⑤一卷に地(軽み)の部分と文(丈高い)の部分の配慮がなくて単調になっていないか。所で、この「深川や」の巻を通観するに、①②③の点では殆ど文句がなく、ただ④の花の句に問題があるというのが三人の意見であった。それで、句の花・挙句を
花に酔ひ夢と暮せし武家屋敷 B 晩春 自
お琴の稽古孫の永き日 M 三春 他
と直す事で、この合評会は終わった。これで一応無難な一卷になったと思う。

猫養同人会

故式田和子會長一周忌追善運句興行

平成十四年六月十六日 於東郷神社

歌仙 「梅雨冷えや」 東 明雅 捌

梅雨冷えや形見の著書を掌に

山梔子の香り偲ぶ面影

バレ―部の練習の声揃ふらん

ベンチに積んだ弁当とお茶

北帰行夜行列車の窓の月

露かきわけて谷の細道

執心のピオラ習ひに秋深く

彼に内緒の日記鍵付き

黒髪がすてきと言はれつつい本気

種を明かしてうけるマジシャン

ドリブルのスーパーマンも引退す

寒の月さす球場の屋根

潮入りに舳ひを強く締め直し

福石撫でて祈る平安

備前箏十代続く壺作り

インターネットで探す売れ筋

花の頃ローン完済祝ひ酒

ちよつと来い来い小絞鶏が呼ぶ

男の児童の節句に生まれたり

赤にしようか黒にしようか

運かけて大穴狙ふオッズ表

幅広帽のクイーンお出まし

留学の序碧い眼つれ帰り

夫を迎へる三つ指の札

蜘蛛の囀の軒端に揺れて餌を待ち

峠へうねる麦秋の風

初個展レンタルギャラリー賑ひて

北斎を夢ユトリロを夢

阿呆陀羅經木魚二つを照らす月

爺婆分けて擦林檎食ふ

カプセルを開き身にしむ同窓会

パーキングには新車轟き

湯あみして命のどこか光らせる

天城と決める隠棲の山

骨董市猫も杓子も花吹雪

宅急便で届くいかなご

連衆 東郁子 日高玲 橋野代々子

五十嵐讓介 松本碧

歌仙「冷酒や」 青木 秀樹 捌

冷酒や蓮の臺の心地よき

蜻蛉生まるる池の静寂

ギターデュオ軽くとレモロ響かせて

ゼリービンズつまむ幕間

昼の月階段多き坂のぼる

秋の扇を飾る店先

北嵯峨の蜥蜴も穴に入る頃か

丸めた頭隠す逢引

極道が見せる弱さが可愛くて

残す勇気と捨てる決断

賞味期限二度も三度もリセットし

突然熄みし島の長雨

舟起大漁旗に細き月

鷹と鷹匠強き眼光

おむすびに海苔つけるわびさび

喚声は早朝野球花万朵

ベンチの下で仔猫鳴きたる

かけるふに国会議事堂ゆらめきて

電飾看板たてに取りつけ

人形の脚線美みせ運ばれる

ハンニバル將軍黒き眼帯

ヨーデルの咽ぶがごとく呼ぶ少女

二貫の鮓のやうに添ひたい

ぴんぴんとはねる小枝の矯めやすく

びくともしない司令塔なり

後ろにはムハマド様がいらつしやる

何でもいいのちよつと休憩

月の客国債談義きりもなし

台風一過すべてご破算

放屁虫逃げる構へで窺つて

磁石の針で真南を知る

リモコンのロボットですする対校戦

園児のお絵描き春動き出す

この山の花はことしも咲き満ちて

耕して読む歳のとりかた

連衆 古賀一郎 八代 雛 鈴木千恵子

山寄一恵 武村利子

突然熄みし島の長雨

舟起大漁旗に細き月

鷹と鷹匠強き眼光

おむすびに海苔つけるわびさび

喚声は早朝野球花万朵

ベンチの下で仔猫鳴きたる

かけるふに国会議事堂ゆらめきて

電飾看板たてに取りつけ

人形の脚線美みせ運ばれる

ハンニバル將軍黒き眼帯

ヨーデルの咽ぶがごとく呼ぶ少女

二貫の鮓のやうに添ひたい

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

千 利 恵

歌仙「雲の峰」 市野沢 弘子 捌

雲の峰仰げば奥の光りたり

掃き浄めたる庭の十葉

アイチエンピーズ組み込み作るらん

講習会はいつも満員

橋の上に子らも集ひて望の月

声のはるかに雁渡りゆく

テディベア端に坐らせ後の難

ベツカムスマイル憧れの的

鼻ぺちやの大和娘の付け睫

腕立てふせはいつも百回

自転車を自由自在に乗って見せ

月さえざえと犬の遠吠

肩をくみおでんの店ののれんわけ

本家分家は仲が悪くて

ニューヨークマフィアの契り空をうつつ

書名うすれる革の背表紙

酔狂の気風継いだる花見唄

ストック磨く田打ちおへれば

歩きさう伎芸天女はうららかに

京の工人一子相伝

どうしても癖の直らぬつぎ煙草

絵手紙を描き退院の弁

制服の通るたんびに口笛を

蠍のやうな毒にひかれて

隠し児の認知騒動裁判へ

DNAはシャーレーの中

弥

代

庸

代

弥

壺

津

同

庸

壺

弥

代

庸

弥

津

壺

代

庸

代

庸

美津

和弥

庸子

美代子

弘子

水壺

壺

捌

これ以上冷えるものなし爛ざまし

白州正子の夢幻抄読む

月昇り菊に捧げる列につき

旅の人にもわかる秋鮎

岩洞に祀る石神在まつり

印パ紛争いかに終結

紫綬褒章固辞してひとり悔やまざる

老いの二人は共に笛吹き

誰彼も童の如く花を浴び

点となりゆく紙の風船

連衆 今宮水壺 山田美代子 久保田庸子

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

権頭和弥 桑原美津

壽

清

ん

ん

巳

道子

壽子

暁巳

かりん

清子

麻子

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

昼の月階を昇れば寒の梅

ドリップ珈琲銘柄はモカ

ズーラシア麒麟の首が抽んでて

残土利用で交す討論

よく見れば若木の花の夢の島

鉄の扉も錆びる春荒

復活祭卵きれいに染められる

あくまで細し子羊の眼の

嘘うまくついてすんなり事運ぶ

元級長が売る分譲地

疎開児の頃は皆んながひもじくて

晒のたふさぎ今も用ひる

愛すれば蛇の寝蓐も玉の床

妬いて抓つて毛虫飼ふ女

びつたりの入れ歯作ると大流行

リニックかっついでおかず横町

川波にぼっかり月のこぼれあて

小諸虚子庵糸瓜ぶらりと

蕨紅葉ローカル線に地酒酌む

純文学休みスポーツライターの

拙者とは昔堅気の今は野暮

CDROMの棚田百選

吉野山孔雀に目ざめ花の朝

若布の腕の塩加減よき

連衆 下鉢清子 登坂かりん 島村暁巳

杉山壽子 加藤道子

杉山壽子 加藤道子

杉山壽子 加藤道子

杉山壽子 加藤道子

杉山壽子 加藤道子

巳

清

ん

ん

巳

道子

壽子

暁巳

かりん

清子

麻子

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

捌

巳

歌仙「蛩」 蒲原 志げ子 捌

かがやきて蛩そらへと消えにけり 志げ子

しばし香りをえごの咲く下 利子

折り紙の舟は窓辺に置くならむ 紀子

カスターネットのひびく教室 志世子

満月の兎に心ときめかし 哲

宇宙夢見る青蜜柑たち 凡

後の難こくりこつくり流れゆく 昌子

旧家三代またも婿殿 利

妹は独身貴族衣装もち 昌

ワタシ的には愛の探求 紀

「君が代」の意味解らねど大合唱 凡

口だけ残る吊し鮫鱈 利

宰相の構造改革月凍る 昌

時計屋の刻どれが本当 世

友達のももです亀も一緒です 紀

馬に念仏いうてみる柵 紀

花こぼれ嬰はなにやら上機嫌 昌

弥生狂言外郎を売る 哲

香具畝傍佐保姫は裾なびかせて 利

豊嬉しき碧眼の客 利

チケットはウエブオークションでゲットした 紀

あの手この手で作る贗札 利

晩酌は麦酒にあらず発泡酒 紀

なめくじ長屋に暮らす啞家 凡

恋無限出さぬ恋文積み上げて 哲

ベツカム刈りの人にぞつこん 昌

追っかけてひしと抱きあふ離陸前

南北分つ河の滔々

唳々と胡弓の弦は月に濡れ

麻雀好きの膝に溢蚊

誰それに似た顔もあり茸狩

糠味噌の味母に近付く

皴のぼすコラーゲンやらアミノ酸

ラブストーリーなら僕におまかせ

とは申せお手ふれ給ふな花の精

むかしむかしの春の夜の夢

連衆 梅田利子 椿紀子 秋山志世子

中川哲 中川凡

歌仙「ひとり旅」 坂本 孝子 捌

青梅雨や風あれば乗りひとり旅 孝子

甘しと掬ふ苔の滴り 英二

紙芝居団地広場に始まりて 達子

右と左を間違へる靴 志乃

電子辞書いつも放さぬ月の客 健悟

栗飯の盛り少し多目に 泉子

猫の嗅ぐ脱ぎ散らかした秋袷 乃

酒場の隣寸駆け出したる 二

ジエラシーをバンドネオンのしゃくりあげ 悟

フリーガンにも愛国の情 乃

正直の頭は髪は早く抜け 悟

この流感はどこで貰ひし 達

有明の霜踏み出づる山の寺

発止と打ち込む刀の相槌

抱かれて世継ぎの姫の健やかに

百鳥の羽休むのどけさ

花の昼ふつくら焼けたシューの皮

オペラグラスに春の珍事を

鯨群来潮気湿りの札数へ

何を夢みる少年の黙

短夜の双曲線は交らず

藪蚊叩いて地史脱稿す

あらこんな所に神の名を彫って

怒るルオーのミゼレノービス

淋しさは夕日に染まるラヴホテル

人妻といふ性に惹かれる

囚はれの詩心ばかりを昂らせ

紙ひかうはまだ降りて来ず

月煌々東シナ海照らしけり

記憶術とは爽やかな息

渋柿のたわわに父の三年忌

おけさの笠も壁に古びぬ

島の道うねうねとくる郵便夫

キティちゃん電報知らず合格

モヒカン刈りに笑ひはじける花の下

集ひして利く手揉茶の香

連衆 日高英二 篠原達子 宮内志乃

佛淵健悟 青木泉子

二

泉

悟

乃

達

孝

乃

悟

二

泉

乃

二

達

二

悟

乃

悟

乃

達

乃

悟

乃

孝

泉

歌仙「梅雨めぐる」 式田 恭子 捌

開けぬまま換へる煙草や梅雨めぐる 恭子
 とうすみ蜻蛉すいと肩先 美奈子
 ビー玉の色さまざまにちらばりて 了齋
 親子奏でる一絃の琴 珠枝
 高階のお席へ月と昇りつめ 将義
 少し遅れて冬支度など 加津枝
 東京の東西南北木の実降る ふみ
 とさか頭が闊歩する街 奈
 恋人をアイテム別で取り揃へ 義
 バッグを売って貢ぐ本命 加
 静電気帯びた裏地のまとひつき 齋
 また増えてゐる指のささくれ み
 千社札鳥居に貼られ冬の月 み
 げそに熱爛話尽きない 義
 国債の格下げ無視の永田町 奈
 風に毀れて止まぬ砂山 齋
 花吹雪声の遠くへ去りゆきて 枝
 かくれんぼする囁の中 み
 若鮎の形を写せし菓子包む 齋
 冒険野郎ひとり行く旅 枝
 プチホテルノートパソコンすぐつなぎ 奈
 オークションならあれも買へるよ 加
 ぞっとする咄の後のかき氷 義
 蛇の脱殻石垣にあり み
 日焼した素足まぶしき島娘 齋
 巡回医師の嬰を孕みし 奈

縁側に猫専用の赤おざぶ さうかさうかと八丁の女 寝て待てば月はかならず照らすもの 秋場所までに幕内昇進 小粒にてびりりと辛き唐辛子 茅葺きいぶす煙たなびき 藍染の作務衣が似合ふ父の背 イヤホンで聴くタンゴピアソラ 訪ね来し津軽の花と舟に乗り なすべきことをなして春興

縁側に猫専用の赤おざぶ 加
 さうかさうかと八丁の女 齋
 寝て待てば月はかならず照らすもの 奈
 秋場所までに幕内昇進 枝
 小粒にてびりりと辛き唐辛子 奈
 茅葺きいぶす煙たなびき 枝
 藍染の作務衣が似合ふ父の背 奈
 イヤホンで聴くタンゴピアソラ 奈
 訪ね来し津軽の花と舟に乗り 奈
 なすべきことをなして春興 加
 連衆 鈴木美奈子 鈴木了齋 花巻珠枝 川名将義 村山加津枝 中村ふみ
 歌仙「夏帯を」 副島 久美子 捌
 夏帯をきりりと締めて笑まひけり 久美子
 山榎子ほのかにほふ庭先 美保
 ホームページ開き見るのを楽しみに 朱鷺子
 オペラの切符やつと手に入れ 守男
 雲間より光を放ち月出番 英子
 遊絲いくすぢ流れゆく里 佐紀子
 赤い羽バックパッカーつけてゆく 男
 サプリメントにだけはこだはり 保
 究極の彼氏はいまだ現はれず 朱
 とさか頭 of 海賊の裔 朱
 カクテルに愛しの女の名のありて 英
 炉辺談話のオフレコは没 男

月凍つる検事ふるしき包み持ち 終天神恙なき年 占ひにまかせ決めたる家に越し 本当の味作る豆腐屋 花の山誰も訪ねぬ細き道 双眼鏡に映る鶯 淡雪に濡れたる句碑の文字を読む 見え隠れしてボンネットバス 理髪店父が息子の髭を剃り 面接試験特技聞かれて モンゴルに長期ステイの夢を抱き パラソル廻し連れだちてゆく 虫を捕る怖さも秘めて小町草 人形の家居坐つてゐる 地震つき損害保険よく売れて 中天の月浮かぶ稜線 禅寺丸・富有柿・御所柿どれも好き 出世頭の友とどびろく 俱会一処地上静かに降る小雨 無心に削る4Bの芯 園児等の歓声あがる紙芝居 ワールドカップサポーター沸く 咲き誇る染井吉野の花の謎 春の波寄す土手の渡し場

月凍つる検事ふるしき包み持ち 朱
 終天神恙なき年 英
 占ひにまかせ決めたる家に越し 紀
 本当の味作る豆腐屋 朱
 花の山誰も訪ねぬ細き道 保
 双眼鏡に映る鶯 男
 淡雪に濡れたる句碑の文字を読む 英
 見え隠れしてボンネットバス 朱
 理髪店父が息子の髭を剃り 保
 面接試験特技聞かれて 紀
 モンゴルに長期ステイの夢を抱き 紀
 パラソル廻し連れだちてゆく 男
 虫を捕る怖さも秘めて小町草 保
 人形の家居坐つてゐる 英
 地震つき損害保険よく売れて 保
 中天の月浮かぶ稜線 保
 禅寺丸・富有柿・御所柿どれも好き 保
 出世頭の友とどびろく 保
 俱会一処地上静かに降る小雨 英
 無心に削る4Bの芯 保
 園児等の歓声あがる紙芝居 朱
 ワールドカップサポーター沸く 朱
 咲き誇る染井吉野の花の謎 紀
 春の波寄す土手の渡し場 久
 連衆 高瀬美保 橋朱鷺子 近藤守男 佐古英子 間佐紀子

歌仙「ダチュラの蕾」 豊田 好敏 捌

根分けせしダチュラの蕾ふくらみぬ 好敏
 縮浴衣を通りゆく風 敏女
 水鶏さく白磁の皿を磨きみて 良子
 アップで撮りしみどり児の顔 やすこ
 北流す大河白々月の下 良彌
 崩れ築より泳ぎ出す魚 要子
 演し物は阿豆流為となる秋芝居* 良
 勝者は悲し敗者よりまた や
 いつになくやさしくなれる君の膝 要
 心ならずもカッブルとなり 良
 さながらに現代戦争W杯 彌
 金髪茶髪街に溢れる 要
 雪月夜猫とテレビを観る媼 女
 塩汁鍋のふつふつと煮ゆ 良
 東京へ行くとは言ひはる次男坊 や
 通信販売あてもなく買ひ 要
 海見ゆる墓苑ぐるりと花の雲 や
 やつとかめやなも蜆豊漁* 良
 凧作る父子に稀な日曜日 良
 家事の分担平等にして 要
 たちまちにゴミ食べ尽くすバクテリア 敏
 地球に少し増えすぎし人 や
 江戸切子銘酒こもごも酌み交はし 彌
 青簾越し湯浴みする背 要
 還暦に初めて知りし恋の味 良
 佐助みたいな男欲しいの 女
 甲高くシンセサイザー響ききて 要

あとひと息で写経千巻
 眠られぬ配所の月の有処ありところ

露ふくむ草馬にたつぷり 彌
 かき分けてべつたら市の群れの中 同
 ちんと水漬かんだ半纏 女
 よみがへる汽笛一声ステーション 要
 阿蘭陀渡る髭のキャピタン 良
 花の中最後の打者も凡退し 敏
 上手に歳をとりてうららか 良
 *阿豆流為 坂上田村磨の亡ぼされた陸奥のえみし
 の頭目
 *やつとかめなも 久し振りだねの名古屋方言
 連衆 繁原敏女 本屋良子 池田やすこ
 佐藤良彌 山本要子

歌仙・擬(二歌・二月)「杜若」原田 千町 捌

(伊勢物語に倣ひ五文字を句の上に置く)

いざ出陣勝負を賭ける関の声 洋
 鹿児島みやげの貝のおはじき 治
 バラライカ爪弾いてゐる冬銀河 啓
 初雪積みし碑の上 義
 此頃は義父と父とが囲碁に凝り 志
 偏頭痛にはアロマテラピー 洋
 飛び梅の語り継がれし物語 同
 心字の池を巡る料峭 治
 卒業に疑問符のつく次男坊 洋
 おれ鳶になる母はびつくり 義
 アイデアも臓器も今や商売に 志
 有田の皿を包む広重 義
 先輩に奢られてゐる鰻料理 志
 キックオフする汗の貴公子 啓
 星の契り二人の鼓動重なるか 洋
 付けて離れて流し灯籠 啓
 東の間の暇を見つけて地芝居に 治
 夢幻に遠き笛の音 義
 小狐のぴよんと跳ねたる月の丘 治
 今は昔の冬至蒟蒻 志
 駅長は手持ち無沙汰の通過駅 洋
 ポケットにあるユーロ新札 治
 夜明け前コップ一杯水飲みみて 治
 雲の流れはけふも緩やか 義
 御衣黄色よ普賢象よと花の園 義
 眠れる嬰に止まる蝶々 町
 連衆 峯田政志 小池啓子 生田日常義
 大島洋子 加藤治子 啓

猫養会例会

平成十四年七月十七日
於 江東区芭蕉記念館

歌仙「梅干す」 秋山 志世子 捌

梅干すや安堵の日和つづきをり 志世子

膝を汚せし嬰のかたびら 好敏

真白き帆水平線を横切りて 啓子

駅のポストに入れる絵葉書 志乃

道づれの後先かはる十三夜 和弥

こほろぎすだく苑の草むら 富美

新蕎麦の幟はためき客を呼ぶ 敏

海外移籍見送りのファン 啓

彼の人に誘はれてゐるノクターン 弥

燃ゆる心と逆の口下手 敏

陶芸家めざして山に籠るらん 啓

吹雪そめたる赤松の原 富

声明に寒満月を振り仰ぎ 乃

株売らさるるニューヨークから 敏

チャウチャウも奴の肩に担がれて 弥

嘴大鴉闊歩する路地 啓

「花咲か」といふ地酒酌む花の宴 弥

即興詩人歌ふのどらか 乃

姉帰る春のシヨールはすみれ色 富

武蔵転じて「バカボンド」とや* 弥

前半生まづ勝ち組に置きし席 敏

自由市場の化石いろいろ 乃

既の子難民キャン普せはしげに 啓

昼寝の夢の占ひは吉 乃

この先もあなた任せで何処までも 富

試験媚薬の効き目抜群 乃

一文字眉そっくりな児を産んで 富

下り築には藻の絡みつき 啓

捨てられし牛の去りゆく月の雲 敏

むかごの飯にめがねくもらせ 乃

ジャズならばまづスイングが最高さ 敏

介護記録に付ける顔文字 啓

岩の洞海ん坊主の来て憩ふ 弥

大阪場所に大関を賭け 乃

巡りあふ万葉の花の新世紀 世

ふはと飛び立つ折り紙の蝶 富

*「バカボンド」、漫画「宮本武蔵」の主人公の名 啓

連衆 豊田好敏 小池啓子 宮内志乃 達子

権頭和弥 村田富美 常義

歌仙「御蔵河岸」 篠原 達子 捌

朝涼や上げ潮どきの御蔵河岸 達子

夾竹桃のこぼる板扉 常義

パークカッション腹の底まで響ききて 丁那

左右の違うスリッパを履き 美恵

お月見の準備万端客を待つ 佐紀子

ふらりふらりと庭の糞虫 弘子

新絹の捲き戻してやや固き 末季

納得尽で嫁して来ました 那

わからない言葉同志で抱き合つて 恵

南回りのヨーロッパ便 常

天頂に羽を展げる星座あり 那

着ぶくれてゐる廃帝の月 常

くつさめの度に絵心膨らんで 那

ヘルシージュース蜜を少なめ 弘

日曜日指切りげんまん遊園地 紀

鼓笛隊員けふも練習 常

道白くなるまで丘の花吹雪 弘

仔猫も乗せて乳母車押す 恵

永き日の酒に酔うたる笑尉 那

ナースルームのモニター映像 那

怪談の果てることなき中三階 季

紐と見えたは蛇でありしか 恵

宵山の雨のまにまにコンチキチン 那

男と女生臭き息 那

惚れ性はDNAの故にして 恵

操の緩き騎士の妻たち 那

安売の絨緞ひそと毛が抜ける 恵

とみにかしましごみの分別 季

亥中月能登の七尾の住み易き 那

しかと数へる渡りゆく雁 弘

林檎剥くジャックナイフは父譲り 常

いいことばかり夢占師 恵

しろがねの小筐の鍵は外されて 那

春手袋のあはき感触 紀

花の昼テニスのラリーなほつづく 達

お喋り楽しじゃこのお結び 執筆

連衆 生田日常義 浅賀丁那 山口美恵

間佐紀子 市野沢弘子 伴野末季

歌仙「清洲橋」 長崎 和代 捌

白南風や飛び翔つさまに清洲橋

朝顔市のピラに足止め

マグカップ苦味珈琲濃く淹れて

画廊勤めの馴れし受付

公園の猫のたまり場月照らす

忘れ扇がこんなところ

盆箆にたつぷりと盛るふかし蒔

少年野球美人マネージャー

痒いとこ手の届かない仲の俣

君の名なんぞ知らないでいい

知事室を持たぬ持たぬとクリスタル

月冴え渡る湘南の海

赤電車終大師に駆けつけて

袖珍本に眼鏡掛け替へ

竹簡の発掘案の歴史解き

ネットで株を買へる世の中

花の下ウルトラマンは忙しく

城は霞の酒は蓬萊

俊寛忌返せ戻せと声残し

七代続く太棹の家

かみさんはい、年をして人みしり

有機栽培だけにこだはる

スグレモノあちこち漁り更衣

アクアラインへ誘ふフェラーリ

三角四角もつれしまの恋の渦

化けてる時に声かけないで

年上の女の味にのめりこみ

大聖堂の鐘ひびき来る

アルプスを越ゆ月明の国境

ポルトフォリオを読めるうそ寒

新蕎麦をたぐりてはずむ同好会

手足口病癒えて通園

亡き後に戦を詠みし歌集出る

万華鏡には夢のさまさま

花ふぶくウイニングランのいつまでも

蛙鳴き初む野辺の夕暮

連衆 内田麻子 橋朱鷺子 伊勢本如代

登坂かりん 青島ゆみを 西田一枝

水曜の町の熱やくひな笛

庇零れるのうぜん朱

弁当盛る箸の捌きの無駄もなし

歩きながらゲーム離さず

真正面満月おはす路地に折れ

掲示板には秋の番付

山下の肥えし鞍馬の引く薪

部のマネージャー声の愛らし

お地藏さんみたいな彼の膝が椅子

対立候補の出ない知事選

奉加帳押し付けに来る大店主

ユニクロ尽しうちの冬服

新幹線雪野の果ての月を追ひ

古代史議論灰神楽立つ

一斗樽女ばかりで呑み干さん

試験放送本日は晴

プロムナード花の楽隊拍手浴び

種痘の痕が見える肩先

猫車立てかけてある遍路宿

ぼそつと話す少年の癖

反発の視線の先に父のゐて

機械の止まる家内工業

レオタード去年の柄に飽きあきし

来ると言ひまたこぬと言ふ奴

蟬生るゝところに棲みつく四畳半

爬虫の爬とはぬめりあること

転身を賭けたクイズに予選落ち

前歯で噛めぬ湿けた煎餅

居待月憎さいとしさ碁の相手

菊人形の姿すずやか

身をやつし留学生ハロウイーン

脚本賞をバネに世に出る

総ざらい抜刀血の吹く殺陣となり

栄養剤をまとめ買ひする

ゲノムにも散り込むばかり花吹雪

金婚夫妻ゆらすふらここ

連衆 蒲原志げ子 橋野代々子 式田恭子

松島アンズ 近藤守男

新幹線雪野の果ての月を追ひ

古代史議論灰神楽立つ

一斗樽女ばかりで呑み干さん

試験放送本日は晴

プロムナード花の楽隊拍手浴び

種痘の痕が見える肩先

猫車立てかけてある遍路宿

ぼそつと話す少年の癖

恭

恭

守

代

守

代

守

代

守

恭

恭

守

代

恭

代

守

同

同

守

同

代

同

代

守

代

守

代

守

代

歌仙「夏帽子」 佛淵 健悟 捌

交差点渡るや犬の夏帽子 健悟

ゆさゆさ香る腕の白百合 あかり

鍵盤に風のバラード語りあて 美奈子

パン焼く仲間長い休憩 一恵

出航の碇をあげる十七夜 英二

残る燕と帰る燕と 景翠

酸漿の実を吸ってみる庭の隅 未悠

探しあぐねる目隠しの鬼 二

恋文は一筆箋の走り書き 恵

サッカー場からキスの直行 二

勝ち負けでモヒカン刈りの色を替へ 二

火の用心と覗く隣人 翠

尻に磨かれ三日の月の鋭き 翠

マウンテンクック眠る茫々 翠

身ぐるみを剥がれし婆のおろおると 翠

鏡の中に他人の顔が 翠

酔ひ痴れて花にとられし己なる 翠

有明海にむつ五郎跳ぶ 悠

春愁のハザードマップの行き処* 奈

美味しい水は買って飲むもの 悟

銭湯を造り直してとんかつ屋 奈

マスターの名は天下太平 翠

不思議さは子を産む毎に若返り 二

汗なめらかに豊稔の臍 奈

騙し絵に百日紅の翳が落ち 悠

時計かちりと十二時を指す 悠

政界は阿吽の呼吸大切に 奈

火薬の匂ふアフガンの空 同

月照らせ世の隅々をはつきりと 恵

なにより諸の好きな虚無僧 二

蓑虫が糸を伸ばしてゆれてゐる 翠

年金通知と旅行案内 悠

肝臓を作り置けると新医学 悠

佐保姫そつと自転車に乗り 同

縄文の夢甦る花衣 悟

ビルの間に遊ばせる風 奈

*ハザードマップ 自然環境の悪化状況を示す地図 奈

連衆 中田あかり 鈴木美奈子 山寄一恵

日高英二 岩垂景翠 棚町未悠

歌仙「どぜう汁」 松本 碧 捌

川風に揺るる暖簾やどぜう汁 碧

甚平姿軽やかな客 明雅

Vサイン学校代表駆け抜けて 千町

ポストまで行くビッグルを曳き 郁子

潮騒の丘にひと筋月の道 一郎

秋の七草吾子に教へる 弘子

時代祭仕丁の役の輿を負ひ 町

男言葉の女学生達 雅

あの人もこの人も好き迷ふなり 郁

コンピュータで吉とでるまで 弘

県知事を辞職してまた出馬する 碧

狐狸の化けしかもうひとつ月 町

世田谷の檻樓市で買ふ大福帳 雅

バターたつぷり焼じやがを食べ 郁

血糖値少し高めと医者告ぐ 弘

室内自転車届く通販 弘

「你好」の後がつづかず花の旅 町

家鴨よちよち春泥のなか 郁

出勤の黄金週間部屋広し 弘

時差呆けちよつと酒でまぎらす 町

思惟を解くこともありしか弥勒仏 郁

ぐうたら息子カラオケに凝り 雅

きもだめしいの一番に逃げ出して 郁

蜈蚣蠅に蜘蛛と蛇 郁

ベツカムの背のタトウにまた痺れ 弘

金と男にや私目がない 弘

直立し最敬礼の社長連 雅

浮世のあはれ定年の秋 雅

満月の皓々として胡弓弾く 町

鬼無里村には茸狩りの宿 碧

遙かへと遊ぶまなざし母卒壽 町

ぬざり機織る技を伝へて 郁

ぬるめの湯みどりごんと伸びをせる 一郎

夢で訪ふ故郷の谷 弘

花吹雪息つくひまもぶきけり 弘

ぬくもつてゐる詩の碑 碧

連衆 東明雅 原田千町 東郁子 吉藤一郎 松原弘子

歌仙「遠き日々」 峯田 政志 捌

切割し西瓜に兆す遠き日々

葭簣に集ふ同期傍輩

写メールは仕掛けあれこれ楽しくて

整理のつかぬ抽出の中

月の舟出るも知恵の輪はづれざり

かぜのまにまに揺るる養虫

牧閉ざすジーンズの腰びったりと

ビンテージ物高値取引

学問と恋の二股掛け通す

年上なれど癒し系なり

歌舞伎町かけこみ寺が開業し

水子供養の手紙添へある

懐の鯛焼きほかとあたたく

襖で挟むまんまるの月

もう一番老の将棋のきりもなし

盛り沢山の地域イベント

花時の豪華客船入港す

めかぶとろろはうちのごちそう

春時雨篁を打つ音を聴く

鼻緒のとれた鬼太郎の下駄

往年の銀幕スターカムバック

煙ふかして階切を待ち

天井が廻り始めし下戸の酔

氷小豆のつぶつぶが良し

夏瘦の瞳ますます大きくて

羅越しに魅せられし胸

わ 淳 わ 澄 實 同 洋 淳 澄 同 わ 實 利 洋 淳 利 洋 利 わ 澄 子 實 洋 子 淳 子 利 子 政 志

この頃は心中話とんと消え
構造改革どこの国かね
信州の山河を照らす月濁り

がまん大事と吸はず溢蚊
ほどよさを決めかねてゐる温め酒
パットの技は師匠顔負け

常連のいたづら鴉飛び立ちて
鎮守の森を猿田彦守り

花浴びて浮かれて過ぐす旅の夜
往きつ戻りつ耕のひと

連衆 梅田利子 横山わこ 上月淳子
大島洋子 梅田實 八角澄子

澄 志 わ 淳 洋 澄 利 淳 實 利

日は短く辺りは暗くなり一つ一つ表札を確
かめ暫く探しつづけてやっと式田と書いた
門のところへ。

「ごめんください」と、挨拶代わりの手土
産を差し出す暇もなく、

「さあさこっちへ、あ丁度いいわ。貴方月
の句をお出しなさい」と、おっしゃる。

「先生、今晚私は見学させて頂くつもりで
…」と、申しますと

「駄目駄目此処では見学なんてないのよ。
何でも良いからお付けなさい。」と、いわれ目
を白黒。

迷いつつ訪ねてくれば門に月 昌子

探しながら、月が明るくて表札が読めたこ
とを思いながらおすおすと出しました。

「そうそう、それで良いのよ。」
これが後にも先にも私の初めての付け句で
した。

以後この仏間の常連となり、和子宗匠の巧
みなご指導に救われて、長い間居心地の良い
この新人向けのクルーに入り浸っていたので
す。この先生の席が私の連句のインキューベ
ターであり、おかげで出来損ないとはいえ何
とか難に解ることが出来たのだと思っていま
す。天国の宗匠はさぞや苦笑していられる事
でしょう。

忘れられない付合

初めての付け句

中野 昌子

連句とは如何なる物か、露知らない私は七
年程前の暮近く桃径庵を訪ねて彷徨っていま
した。

電話の式田和子宗匠は

「とても楽しいし、呆け防止になるのよ。
おにぎり位の軽い食事もあるし是非いらっし
やい。」と、誘って下さったのです。当時はま
だフルタイムの仕事に就いていてその帰りで
す。荻窪を降りてバスに乗り教えられたとお
りの道を辿っていました。

祖父芹丈の思い出 根津 忠史

父の転勤に伴い、信州から埼玉県の深谷に移り住んだ昭和二十八年から、ほぼ、十年間祖父八十才代、小生十代の頃、祖父は、我が家を関東の拠点としたため、度々来泊するようになった。

度々とは言え、そう頻繁でもなく、来れば来客が多く、掛軸、色紙、短冊の揮毫していることも多く、なるべく離れて、邪魔にならない様にして置けるのが、良い子とされていたので、直に接した時間は極めて短いものであり、更に、祖父は、小生にとつて、あの頃は『ただのじいさん』でしかなかった。そんな『ただのじいさん』とのふれあいの古い記憶を思い出すままに、記してみる。

家の裏に、一抱えもある青桐の大木があったが、その小枝を欲しいと言われて、木に登り、二三本差し出すと、それで消し炭を作れという、何にするのかと思つたら、近所の人に頼まれた掛け軸の下書きに使うと言う、紙を痛めず、跡は羽刷毛で、きれいになるから貴重品だと、残りはしまっていた。一生でたった一回のお手伝いの思い出である。

その際、『何で最後にハナミって書くの』と聞くと、年齢だよ、と教えてくれたから祖父八十三才の時のことだったと思う。節分の夜、突然に来宅したことがあった。

父（忠二）はピーナッツが大好きで、我が家の豆撒きは、殻付落花生を撒き、後で回収して、食べるのが慣わしだった。しかし、『節分には、大豆だよ』と言ひ、大急ぎで母が煎つて出すと、旨そうにポリポリと、年の数以上で食べていた。八〇二〇どころか、九十五で亡くなるまで立派な歯を、誇っていた。小生も、この年になつても、虫歯は一本も無く、引継いだのは、唯一、この遺伝子だけだったと、自覚している。

ある日、珍しく御土産に、茄子の与一漬を買つてきてくれた。余程、その売店の売り子の口上が気に入つたのか、『この漬物は、味は義経で、値段は大弁慶だ』と、繰り返した。那須の与一が、扇的の見事に、射落とした古戦場を見下ろす談古嶺を買つたとのこと。

春屋島 哀れは永遠に美しき

これは、いまでも大好きな句の一つである。

学校で、俳句の解釈の宿題が出た時に、偶々来宅しており、早速質問したところ、句の心は、いつでも、人生は儂い、自然は悠久であると、詠むのであるから、その句の情景や物象を述べ、終りに、人生は儂い、自然は悠久である、と、付ければ良いと言われた。唯一回の、句について、教わつた記憶である。

台風の後だった、と思うが、倒れた柿の古木を、近所の人達が、製材所に担ぎ込み、板

にして、何枚も持つてきたことがあった。その時の句に

波音に古今なし 松も色変えず

があり、今も、信州の家の柱に掛っている。九十九里浜にてと脇に添え書きがあり、何時だったか、現地を訪れた際、丸い地平線と、寄せる白波を眺め、悠久なる自然を実感した。実感と言え、小生、海外赴任が決つたおりに、安全祈願のために、伊勢神宮にお参りし、その帰りに、二見が浦、鳥羽、瀬八丁と回つたあと、那智神社にもお参りした。

瀧全体が、ご神体とのことで、目の眩む様な高さに注連縄が張られており、その滝壺近くには、何台もの灯明台が置かれ、多勢の参拝者が蠟燭を供えていた。

蠟の火の赤く瀧よりの霧焦がす

の句を、目の辺りにして大いに感激した。

この句は、親友の親父さんの、還暦のお祝いに、色紙を差し上げたとい、頼んで書いて貰つた句で、直接、揮毫を所望した唯一の句であり、祖父を偲び、瀧を仰いで、太い蠟燭を供え、心を込めてお祈りした。

百才まで生きて、あとは儲けと言つていた、元氣だった頃の祖父の顔を思い出しながら、古い記憶を懐かしく辿つてみた。了

言語感覚をみがく

―近ごろの国語教室から―

山本 要子

学力低下が話題となつて久しい。その声は近ごろとみに大きくなつてきている。中でも「言葉」に関しては、日常生活の中で目や耳にしやすいだけに実感することがよくある。言語感覚はどうなつてしまつたのか。乗物の中での若者の会話は、まるで宇宙人のようだが、こつこつと使つていけるような節もあるのだが、こんなに違つては、世代の断絶があつて当然と思つてしまう。こうなるといつた学校教育は何をしているのかということになる。そこで、最近訪れた学校の国語授業の様子を少しく紹介したい。

その1 ―声に出して読もう―

「わたしと小鳥とすずと」 金子みすず 子どもたちは、床にぺたりと座りこんでいる。机は教室の周囲に寄せられ、先生は若草色の模造紙を手立に立っている。子どもたちの目は、先生の一手一投足に注がれている。

さて、先生は一言も言葉を発することなく黒板に模造紙をゆつくりと広げていく。子どもたちの目は、すばやく文字をとらえ、口々に読み始める。金子みすずの「わたしと小鳥とすず」だ。模造紙を全部広げ切つたところにはかなり大きな合唱となる。

「好きなところに線を引きなさい。」教師の

数少ない指示がでる。

「全部引いちゃつたよ。」

「途中を抜かしたら、意味が分からなくなつちやう。」

「最後の二行・。」などの声が飛び交う。次に、なぜそこが好きか話し合つていくうちに、話の内容に触れることになる。一行目から順に解釈していく、などしない。さて、個々に音読する。A男が読んだ。小学3年生とは思えない、感情移入した読み方である。すると、すかさず読みにたいして感想が出る。

「A男君の読み方は、この詩全体の意味がよくわかつているんだなあつて思つた。」

すばらしい聞き取り方である。普通この学年くらいであると、声が大きいか、はつきりしているなど、読みの技術的な指摘にとどまることが多い。この発言がきっかけとなり、子どもたちの感想は読み方だけではなく、内容にも立ち入つていく。

その2 ―おもしろいと思つたところは―

「三年とうげ」 李錦玉作 朴民宣絵

この日は、さし絵を描かれた朴民宣さんをお招きしていた。やや細長い変型の図書室が会場だ。畳が三畳ほど敷かれ、座卓、布団、それに背景まで舞台装置が整つていく。

この「三年とうげ」という教材は、めずらしく韓国の民話である。ユーモアあふれ、リズムミカルな文章ときれいなさし絵で、子どもたちに大変人気がある。

さて、授業は、チャンゴの演奏で始まつた。

2、3人韓国の民族衣装を身にまとい、舞台中央に子どもたちが入れ替わりたちかわり出てきて音読をする。頓知少年トルトリと今にも死にそうなおじいさんの演技に演じる側も観客も爆笑となる。さて、国語の学習であるが、黒板も使用せず、一つ一つの言葉の意味を取り上げて解釈することもない。しかし、グループ別の練習中に何度も立ち止まり、解釈をめぐつて話し合いがもたれている。授業の終わりにさし絵画家の朴民宣さんがさし絵の原画を描いた20数年前の韓国のようすを静かにゆつくりと話してください。子どもたちは、食い入るように朴さんを見つめ聞き入つていた。最後に韓国語と日本語で三年とうげのうたを歌つて授業は終わった。今年度から始まつた新しい授業の一コマである。

いやはや、近ごろの子どもたちも捨てたものではない。いい感性をしているではないか。現場の先生も工夫を凝らしてはいないか。よい学習の機会さえあれば、子どもたちの言語感覚はまちがひなく磨かれるにちがいない。そこで考えるのは、連句のこと。前の句につけるというものは、人に添うこと。自分の考えを持ち、自分を主張することに力点が置かれがちな今の教育で、最も欠けているところではないかと思う。

連句を小学生に、という私の積年の願いは、そう遠からず実現すると期待している。

「土良の会スベシヤル」
ドラ

海の歌 江の島篇

中野 昌子

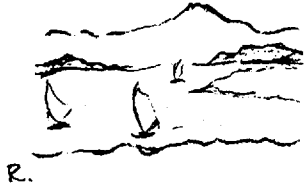
立秋も過ぎたのに持ち越してきた猛暑の
め押し。

湘南片瀬海岸のどんびと若者とヨットを斜
めに見て、江の島の真中にある「かながわ女
性センター」に集まった善男善女の内訳は連
句の鬼？いえ酒鬼、酒仙、その他潮染む面々
も混じる男女七人ずつの十五人余りです。

かつての海の子は宿題の「海的一句」を懐
に持って、先ず一日目は歌仙を三組に分かれ
て巻きました。

二日目は、歌仙二本、両立てで膝送りをし
ながら、同時に「袋まわし」。初秋の句を夫々
袋の中に投句。みんなで点盛をして盛り上が
りました次第。

帰りの打ち上げには美味しい磯料理を堪能
し、珍しい男女七人ずつ平成十四年夏物語を
終えて江の島を後にしました。



海望む足裏に残る暑さかな
青木泉水

送火のかすかになりて海昏し
青木秀樹

ひとしきり蝸の声寄せる波
梅田實

長き橋渡りて秋の潮さやか
須賀敬子

火の恋し人なほ恋しとまなご十三湊
古賀一郎

生命と文明生まる海さやか
佐古英子

弁天も秋の御顔か和ぎの海
鈴木美奈子

少年と仔犬絵になる浜遊び
豊田好敏

藪から晴へ海かゝる橋秋暑し
中野昌子

秋立ちぬ島山の翳海に濃し
生田目常義

稲妻やくれる波頭に走りける
林鐵男

秋入り日背負ひて孤帆戻りけり
水谷紀明

秋の朝靄におさむ波光かな
山田美代子

袋まわし・席題即興の秀吟

初秋の虫

蝸やくれゆく海に句碑ひとつ
鐵男

寒蟬や風吹き抜ける浜の街
美代子

蝸や酒鬼と酒仙の呑み明かし
一郎

邯鄲の一夜の夢の長さかな
紀明

面影は残る蛩に添ひしかも
一枝

朝顔の鉢につまづく寝起きかな
美奈子

赤のまゝ梅田なにがしやさしき目
常義

帰宅してまづ声かける酔芙蓉
一郎

小さき手に種子のはじけし鳳仙花
好敏

秋暑し胸露なる弁財天
敬子

浜道を抜け来る風や秋暑し
英子

秋暑し変れる床の寝の浅く
紀明

秋暑し朝のビールの哀しさよ
秀樹

秋暑し朝のビールの哀しさよ
昌子

事務局便り

◇猫養会十五年一月例会(初懐紙)

日時 平成十五年一月十二日(日)

十一時半～十六時半

(受付開始 十一時)

場所 ホテルサンルート東京

渋谷区代々木2-3-1

03(3375)3211

(新宿駅南口から徒歩3分)

連句興行 「源心」を予定

◇猫養会新会員紹介

佐藤 陽子

◇『猫養作品集 XⅢ』作品募集

一人一巻(捌きは猫養会員に限る)

形式 自由 ただし百韻は不可

書式 四百字詰原稿用紙B4版・縦書

題・捌名・一巡までフルネーム

興行年月日・場所を明記

締切 平成十四年十二月末日(厳守)

送り先 梅田利子

柏市加賀二-十二-十一

〒二七七-〇〇五一

(註)ワープロ原稿可。ただしB4版の

用紙を使用し、余分な文字は抹消す

ること。また、手書き原稿は正しく

楷書で記入すること。

◇第十四回全国連句新庄大会(半歌仙)

九月五日の同大会において、以下の作品
が表彰されました。入賞おめでとうござい
ます。

プレ大会特別賞

上田溪水選・土屋実郎選・澁谷道選

「芥吹かるる」の巻 鈴木 了斎

狩野康子選

「魚すいすい」の巻 鈴木 美奈子

優秀賞

「武相荘」の巻 難波 さえこ

「高麗の衣」の巻 坂本 孝子

◇「猫養会会員名簿」の修正

平成十四年度「猫養会会員名簿」の訂
正および転居は以下の通りです。お手元
の名簿の修正をお願いいたします。

〔訂正〕

・柏電話局の局番 047-XXXX

4ページ目

・長坂節子(番地) 1-40

・小原正子(番地) 2-4-11

・生田目常義(〒) 234-0055

・宮内志乃(電話)

048-524-5386

6ページ目

・山寺辰巳(番地) 26-11

(電話) 243-2009

〔転居〕

・秋元正江

〒277-0042

柏市逆井437-28 蒼生の杜

0471(60)0001

・市野沢弘子

〒354-0015

富士見市東みずほ台2-26-

23-402

(電話は同じ)

・間佐紀子

〒107-0035

杉並区今川3-1-22

エクセル荻窪西511

(電話は同じ)

◇猫養発展基金にご協力有難うございます。

源心庵の会 一万円

神楽坂連句会 一万円

基金の口座 みずほ銀行新宿新都心支店

普通3376045猫養基金

季語の風景 5

佛淵 健悟

秋の句を作らなければいけないという時、

「小鳥」や「小鳥来る」という季語は便利に使って来たような気がするが、時鳥や鷹や鶴だと厄介そうだが「小鳥」ならくみしやすしと思ひこんでのことなら乱暴である。

普通の歳時記では、鳥類に関する季語は見出し語で大体二百弱、別称を入れて数百。小鳥はこのうち四十ほど、別称を入れてその三倍というところだろうか。この場合の小鳥は文字通り雀・鶯・雲雀の大きさ、十七センチくらいまでのもので、秋の小鳥はこの中の十数%、これには、花鶏、鶺鴒、鶉、猿子、しめ、入内雀、稲雀などがある。

これらの小鳥の名前で詠まれたもの、ついで「小鳥」で詠まれた句を挙げてみる。

木のやうに無慾であれば鶴来る 山口 速
良寛の手鞠のごとく鶺鴒来し 川端茅舎
ちりぢりになる楽しさの花鶏かな堀口星眠
雨の日も押移るなり稲雀 影島鏡芝
入内雀来るさきがけの山の鐘 富岡計次
高土手に鶺鴒の鳴く日や雲ちぎれ 珍 碩
錨止めて目白かゝるを見てあたり木下落水
小鳥来る音うれしきよ板庇 与謝蕪村
大空に又わき出でし小鳥かな 高浜虚子
小鳥来てなにやら楽しもの忘れ 星野立子

小鳥来て午後の紅茶のほしきこる富安風生
聖母頌口ずさむ朝の小鳥来し 内藤吐天
小鳥焼く少しあはれと思ひつつ成瀬正とし

小鳥の名の句はそれぞれの性質が彷彿とするが、「小鳥」で詠まれた場合、何鳥なのか見当がつくだろうか。念頭にある鳥を当てるのはかなりむずかしいと思うがどうだろう。ひよつとして、「小鳥」は何鳥かを意識せずに詠めてしまう季語なのだろうか。こんなところにも「くみしやすし」と感じさせてしまう特徴があるように思える。

野鳥学者たちの尽力もあり、現在の歳時記はかなり鳥の生態を反映したものになって来ているが、それでも例えば「鶯」（春鳥）について、江戸時代の『俳諧歳時記菜草』では「鳴時、声に随て両足を互に挙て、琴を弾手を揺すが如し」とあり、「琴弾鳥」の由来とするが、こうした説明を現在も多くの歳時記が引き継いでいる。しかし「鶯が琴を弾く手つき（足つき）をしないことだけはたしか」だそうである（小林清之介『季語深耕―鳥』）。歳時記の記述がモノからかけ離れてしまうのも都合であるが、「見てきたようなウン」とばかりで片づけられないのも歳時記の事象である。

小鳥来る日はサティのCD 健悟

編集後記

◇去る九月二十四日、馬場凌冬の百回忌追善法要ならびに追善俳諧興行が、芋庵連句会の主催の下に、その菩提寺である伊那市の常圓寺で営まれました。凌冬は言うまでもなく根津芦丈の俳諧の師であり、芭蕉の道統に繋がるわれわれの大先達であります。その折の模様は芋庵宗匠・根津英紗さんに次号の紙面において紹介していただく予定です。

◇芦丈師指導の下に信大連句会で明雅先生と一緒に活躍された小出きよみさんが、今年また「かざぐるま」という句集を出版されました。近代文芸社刊・日本全国俳人新書の一環です。どの句もどの句も暖かいフモールに包まれていて、思わず微笑を誘われる楽しい句集です。

蝶のあと犬の鼻来る花なづな
すもも盗みに行く約束を恋といふや
いづれは来る安息のかたち蒲団の裡
父の日のあらためて見る夫の顔
のら猫の鼻ほの紅し恋のあと
(英二記)

季刊 「ねこみの通信」第四十九号
発行者 猫養連句会
編集人 日高英二 日高玲
世田谷区代田三、十九、八
〒155・0033
印刷所 アート工業株式会社